

『現代宗教研究』の由ざるもの

今号より、『所報』から『現代宗教研究』に改題した。『所報』では、現宗研内部の機関誌的な印象を与えるやすいということもあった。しかし、それ以上に大きな理由は、現代宗教に関する種々な問題を研究成果としてまとめてきた編集内容にあった。『所報』一～四号、「別冊」一～二号にみる通り、教学、近代教団史、新興宗教、宗教意識調査および教化研究活動に至る各分野における理論面、実践面の内容をまとめあげてきた。しかも、日蓮宗を基調としたながらも、他の仏教々団や新宗教、キリスト教等の宗教、教団状況、あるいは信教の自由、公害等の社会的問題を研究の視野にすべて報告を行なってきた。

およそ、過去・現在・未来の三世に生起するあらゆる問題は、現代宗教研究それ自体がとりくむべき課題である。歴史に刻まれる社会と人間のいとなみが、たえず現代の宗教に激しく問い合わせ、解答をたえず迫っているからだともいえよう。

『現代宗教研究』が、こうした宗教にとっての現代的問いかけに、研究と実践を通じて少しでもせまつていこうとする従来からの性格は、そのまま継承されねばならない。それは、第一に現代という時機に照明を当てながら宗教研究を創造的、歴史的、実践的に積み重ね、深めていくことにあり、第二は特に日蓮宗教師の教化誌としての特質を豊かにし、現場の布教実践のために啓蒙、活用の役割を果していくことにある。これが本誌の努力目標である。

それゆえ、『現代宗教研究』は、単なる学問研究誌ではなく、現宗研を中心として現代宗教研究の成果を発表すると同時に現場の教師と密着に結びあって、その研究内容を弘め、現実の教化に寄与しようとするものである。換言すれば、法華經・日蓮聖人の教えを肝心としつつ、仏教と教団のありようを追究し、現代的苦悩に対する救済の精神を

確立するために貢献したいという誓願にもとづくものである。

日蓮聖人は、習学すべきものとして、儒・外・内の三つをあげられた（開目抄）、また「この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし」（曾谷入道殿許御書）とも教えられた。法華經の信心をより所として、習学に励むことこそ、正法を弘通する布教実践の土台である、と示された聖人の教えを、この濁世においてあらためて受持し、きりひらいていくことは私たち共通の任務であると思われる。この『現代宗教研究』はまさにこの目標を実現していくために、いささかなりとも多くの人々によって活用されることを、心から願うものである。

